

「特別養護老人ホームにおける入居者の 家族的背景 第1報」

○西村隆二・川村耕造・小崎芳宏

昭和51年10月9日～10日

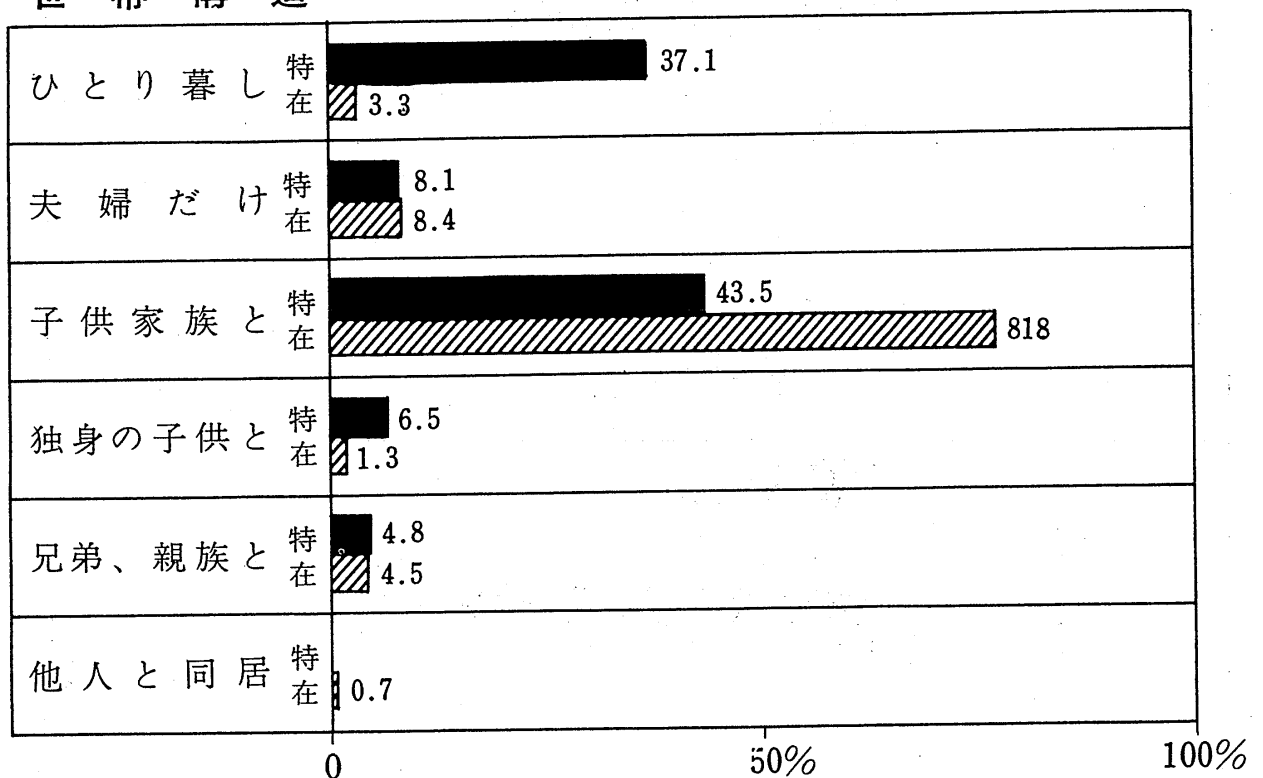
第18回 日本老年社会学会(広島市)

近年老令人口の増加に伴い老人問題が社会的課題となってきた。とりわけねたきり老人の問題は特養施設や他の老人医療施設の利用方法、家族の意識、ねたきり老人の家族の中での立場等多様化している。

そこで、昭和49年6月より開所し、ねたきり老人を介護している当小山田特養ホーム入居者の家族及び、四日市市内の養護老人ホーム、在宅ねたきり老人の家族の意識を調査し、そのニーズと問題点を明らかにし、老人福祉施設の機

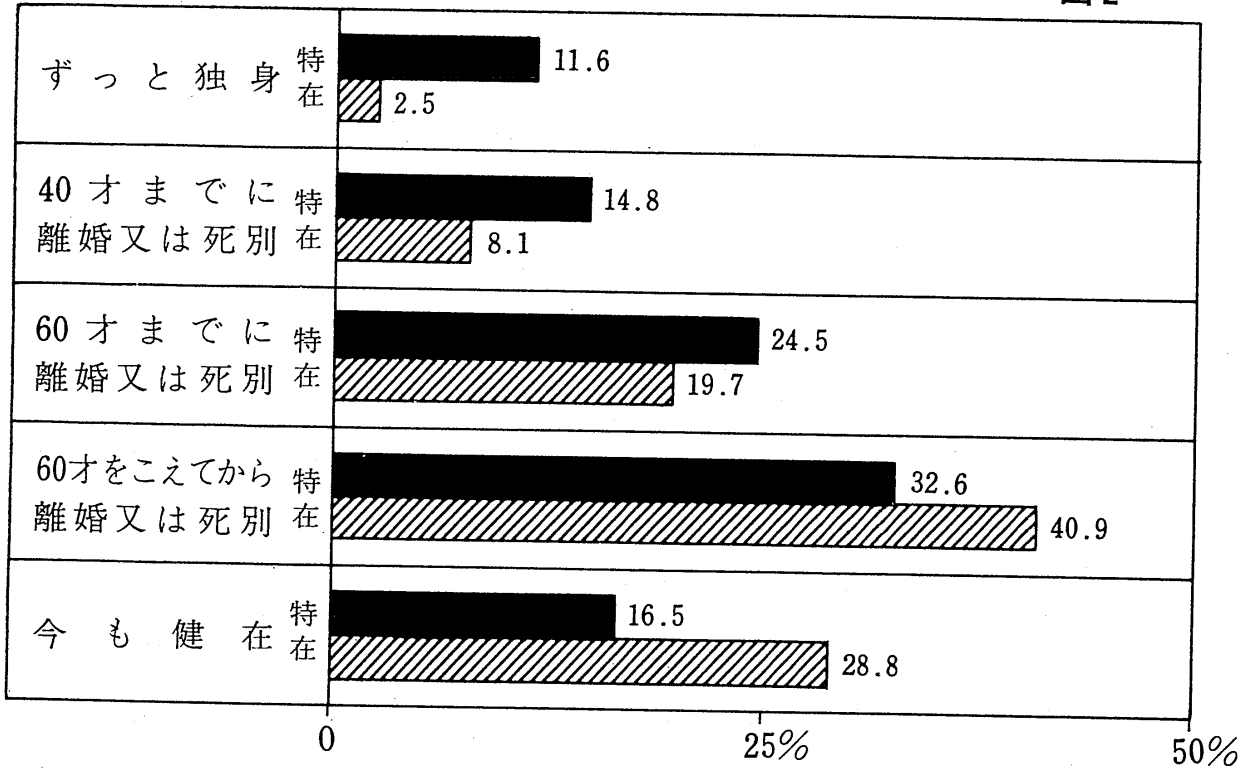
世帯構造

図1



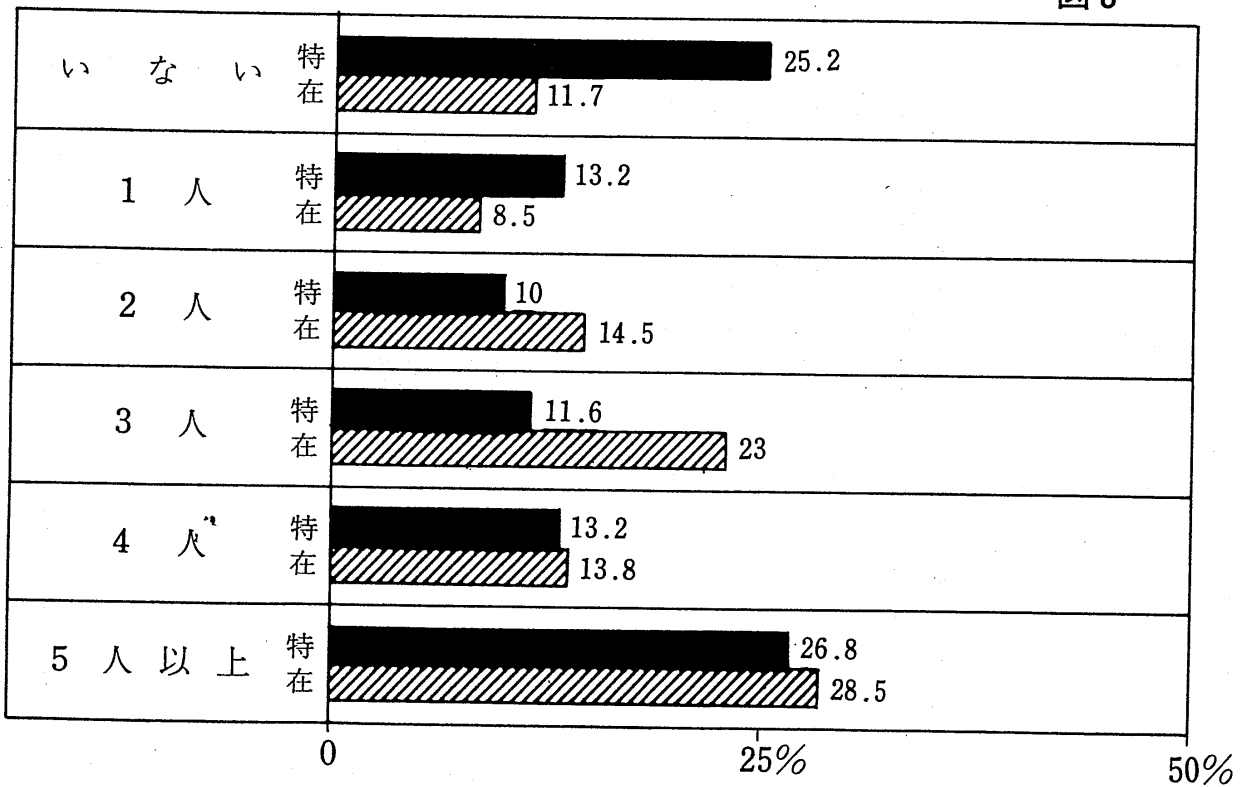
配 偶 者

図 2



子 供

図 3



能について考察したので報告したい。尚、この報告は第一報であり、今後家族的な背景については継続して調査研究をしたいと考えるので今回は中間報告である。

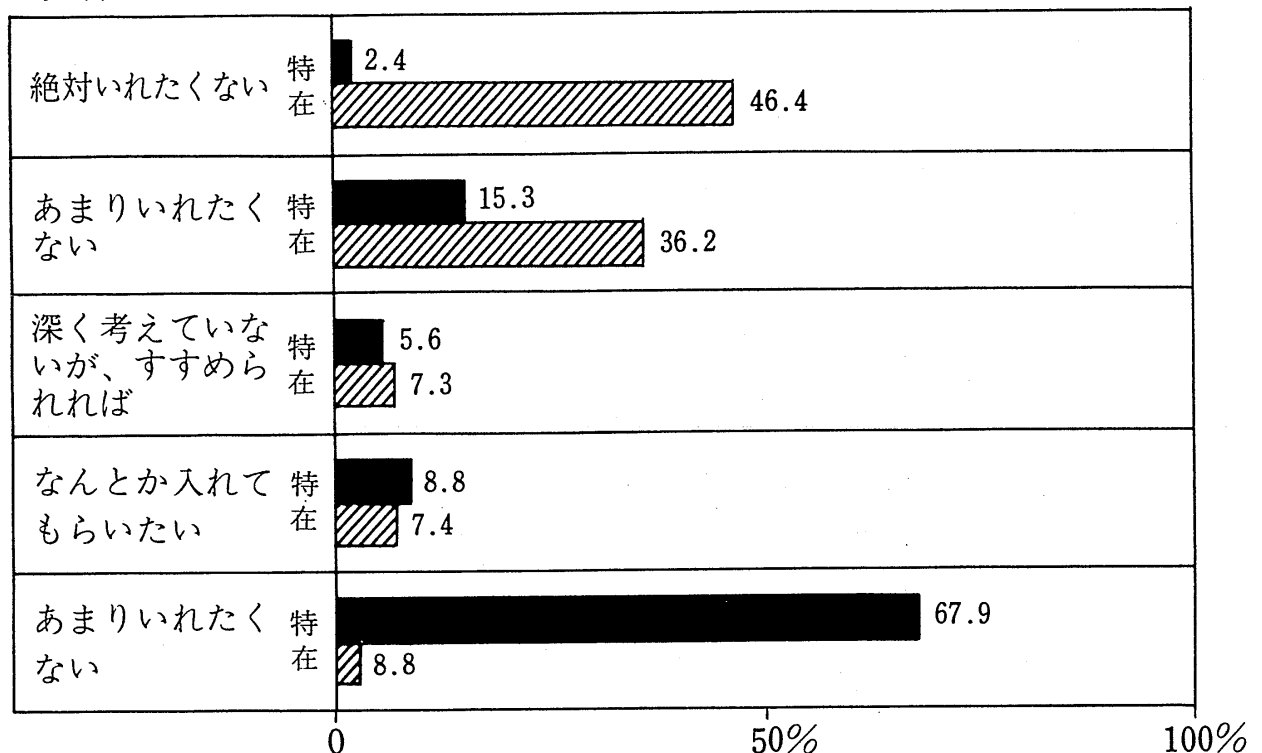
調査は家族の状況、施設に対するニーズ、等についてアンケート調査した。対象は、四日市市内の養護老人ホーム入居者100人及び当特養100人の入居者の家族と四日市市内の在宅ねたきり老人の家族100人とした。

まず世帯構成については図1に示したが、特養入居者と在宅者で比較してみると、ひとり暮らしは、特養で37.1%、在宅で3.3%と大差がみられる。老人夫婦だけの世帯では8.1%、8.4%と差はないが、これらを老人のみの世帯とみなすと特養ではあわせて45.2%が老人のみ、と高い比率を示し、介護者がいないため入居せざるをえない状況がわかる。しかし子供家族の世帯についてみると、特養で43.5%もの者がおり、介護者となりえるものがない場合でも何らかの理由で介護者不在とみなされる者が多い事も分かった。

次に配偶者の状況についてみると、図2のように、特養入居者の60才までの

家族の特養への入所希望

図4



ボケ老人専用施設

離婚又は死別が50.9%、在宅は30.3%、60才以上では反対に32.6%、40.9%と特養入居者は早くから単身になっている者が多く、又夫婦そろっている者も少ない事が分かる。

子どもについては、いない者は特養で多く在宅者の2倍以上ある。

これらの事は、特養入居者は在宅者に比べてその家族が少なく、又配偶者にも早い時期に別れている者が多く、家族の少ない事が特養入居の要因になっている事を示すものとする。

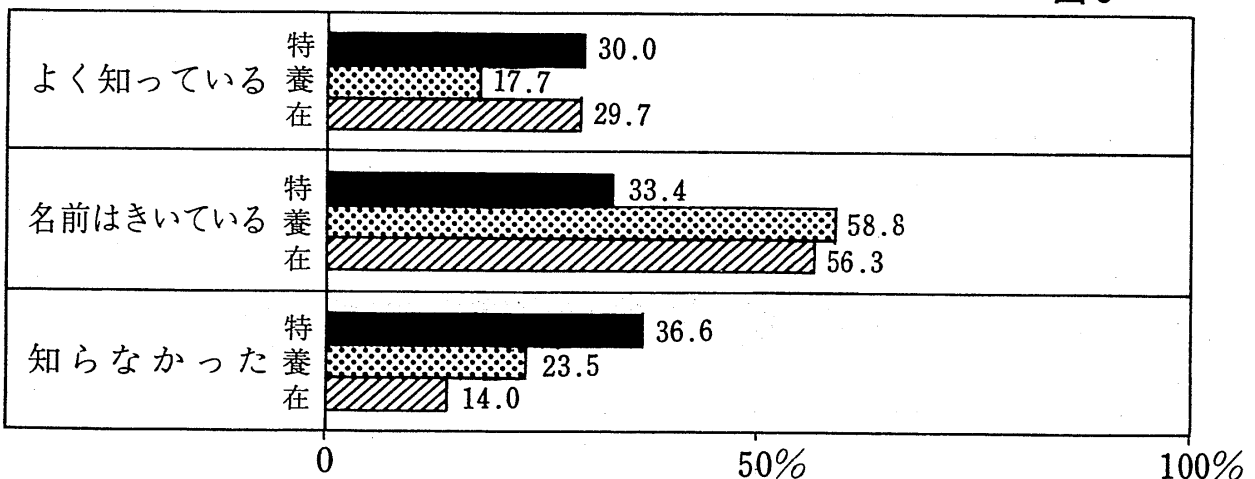
次に特養へ入所させたいかについて家族の意識を図4に示した。

絶対にいれたくない、又はあまりいれたくない、という特養入所の意志のない者と、いれてもいいと思う、なんとか入れてもらいたいという者の数を比較してみると、在宅の者では、82.6%の者が入居させる意志がなく、入れたいと考える者はわずかに10.1%で、入所希望者は非常に少ない事がわかる。又、特養を知っているかについて図5でみると、知らなかった者は在宅で14.0%と少なく、多くの者が特養という名称程度は知っていた事がわかる。そこでねたきり老人はどうするのが幸せと思うかについて、特養入居者の家族、養護老人ホームの家族、在宅老人の家族の意識を図6でみると、老人ホーム利用者は家庭で世話をしたい者が20%前後いるものの、特養の利用希望者が大半をしめ、在宅の者とは全く逆の意識傾向をみることができる。

次に老人福祉サービスについてのニーズを各々比較したものを図7に示し

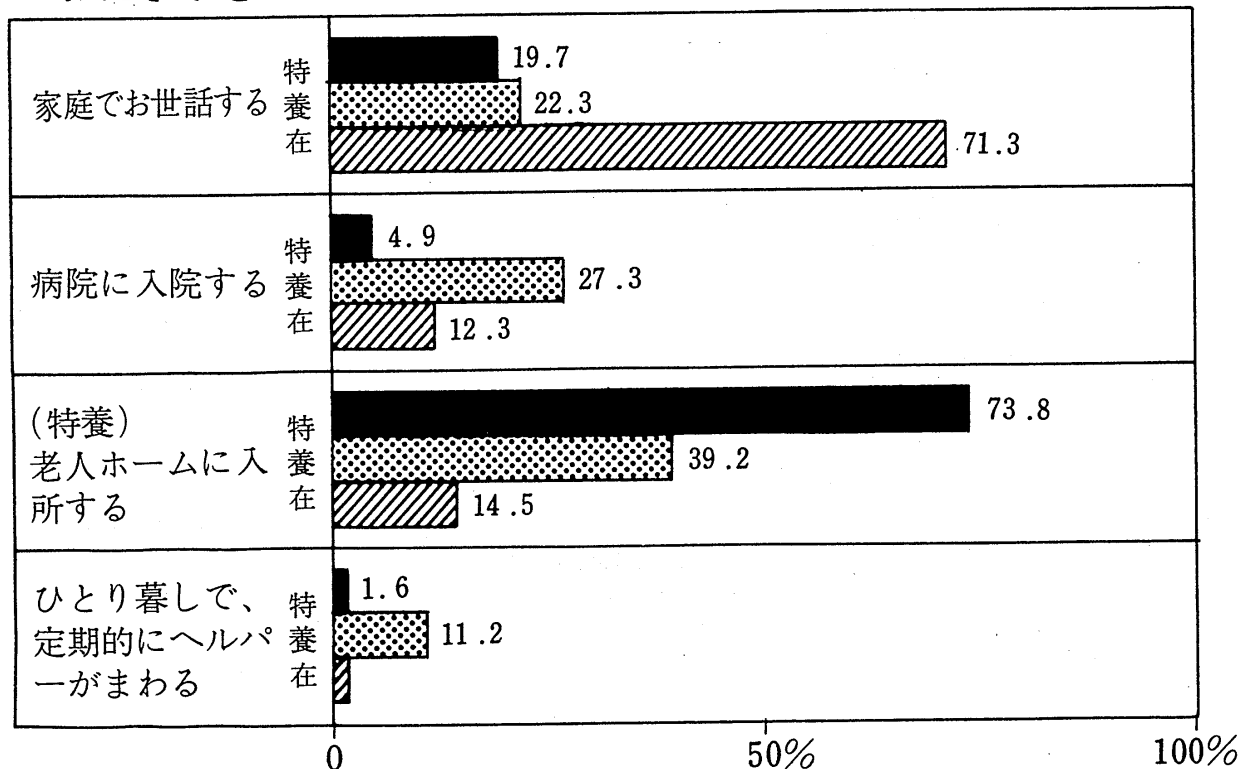
特養についての理解

図5



「ねたきり老人」はどうするのが幸せと思う

図 6



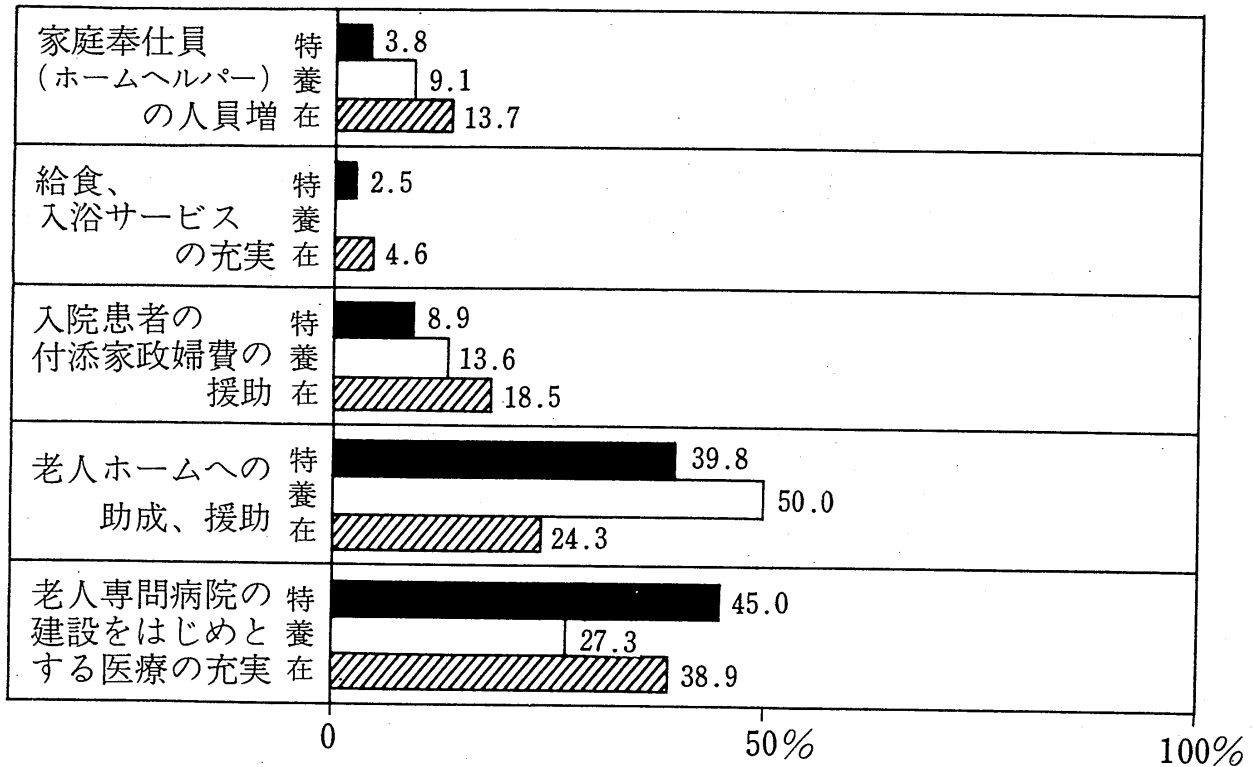
た。

最も優位をしめるのが老人ホームへの助成と老人専門病院の設置、である。在宅のねたきり老人と、特養入居者の意識をみると病院医療の充実を望むものが多く、健康を疎外された者はやはり老人ホームより医療の場を選ぶことが分かる。

ちなみに、現在の特養は医療が極めて薄く国の入所基準においてもねたきりでも病人でない者が入所するとされている。しかし、ねたきりとなるには身体的又は精神的な障害が存在しているのであり、有病者が入居者であるのであって特養の機能は非常に矛盾したものであるといわざるを得ない。その矛盾は入居者の終末期にクローズアップされる。例えば医療施設でない特養であるにもかかわらず、終末を迎えて何の医学的処置もされなかったと関係官庁に訴える家族がいたり、医療関係者である家族が特養の医療処遇を医療施設と比較して特養に講義をしたりすることがしばしば見られる。

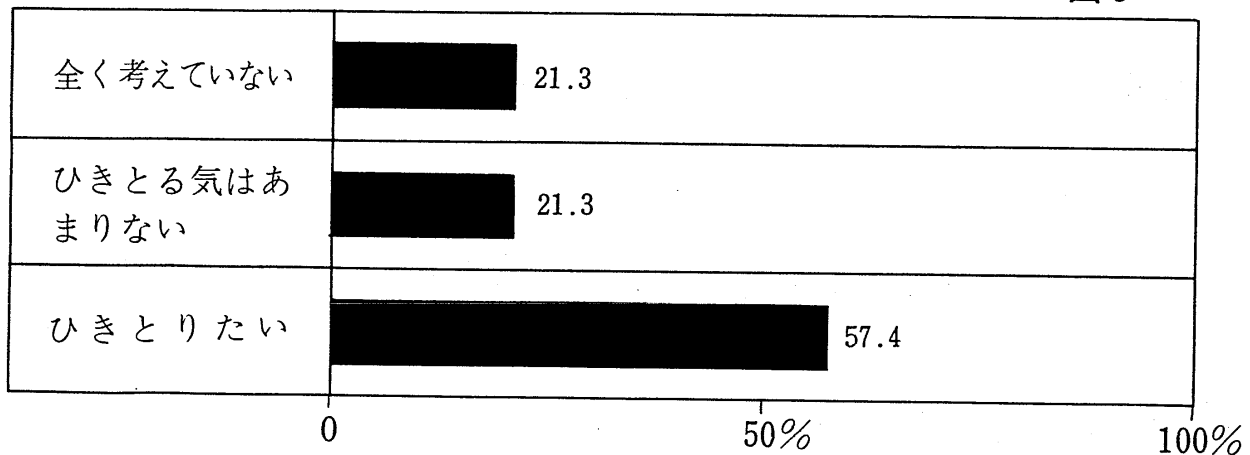
老人病院の設置のニーズの高い事が今回わかり、現在の特養の機能は医療と

図 7



家庭復帰への希望

図 8



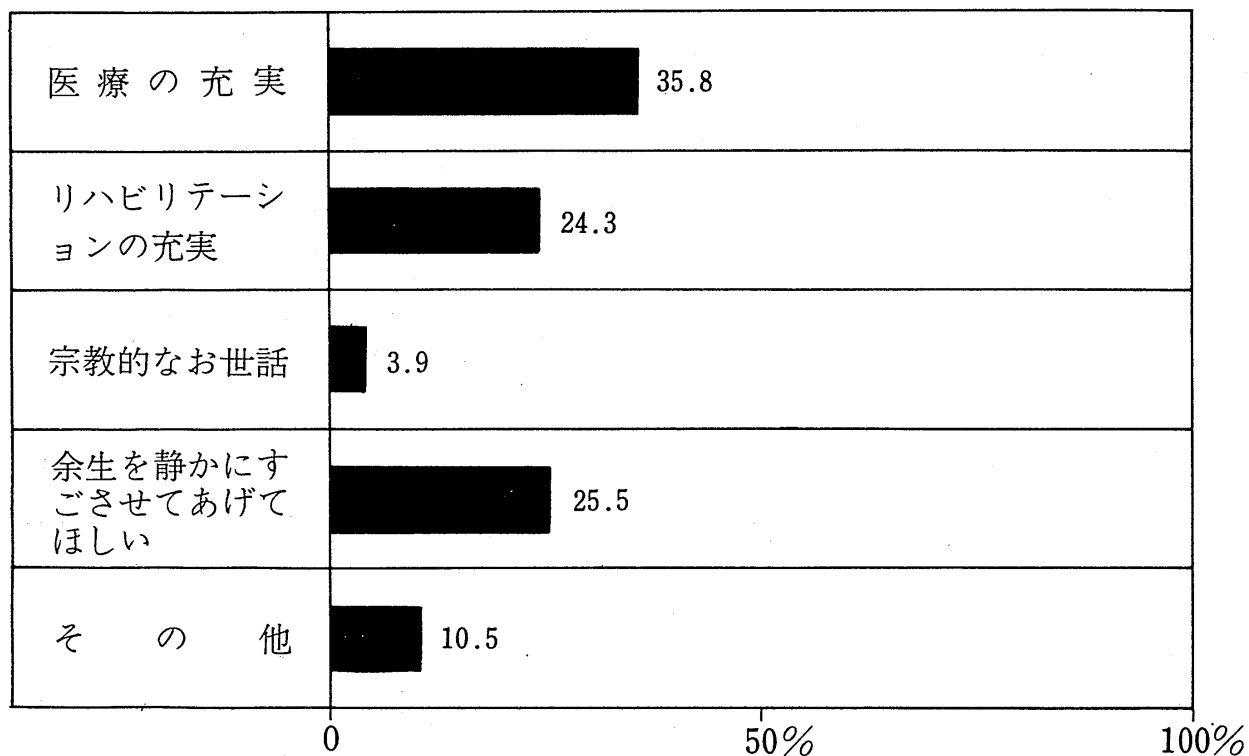
のコンビネーションを基盤に考えなければならないと考察する。

次に特養入居者の家族の介護に関する意識を調べてみた。

まず入居中の老人の家庭復帰への希望について図 8 でみると、ひきとりたいという者が57.4%、そうでない者が42.6%でおよそ1:1の割合である。又、特養への希望は図 9 に示したが、医療の充実35.8%、リハビリテーション充実

特養への希望

図 9



24.3%、あわせて60.1%が医療サービスの充実を希望しており、ここでも特養の機能的弱点が医療であることがわかった。

以上のことから特養入居について、家族の意識は特養へ積極的に人居させたくはなく、むしろ、家族でみたいとする者が多いが、早い時期に配偶者をなくすなど、介護者不在の老人にとって特養への入居はやむをえないのである。しかし、子供は75%の者が存在しており、子供の介護能力や、介護意識に問題があることも推測できた。

又、特養は有病老人の生活の場であるにもかかわらず、医療サービスの能力は極めて少なく、利用者のニーズにはそぐわない事がわかった。今後、特養は医療とのコンビネーションが必要であると考えられる。